

歌誌 黄雞「冬号」投稿歌

(新仮名)

山形短歌会 黒沼 貞志

歌題 独白(モノローグ)

雨上がり茶席の帰路へ斜光射す見遣る家並の屋根輝けり

秋浅し日の斑つらなる山の路踏む松落葉足に優しき

毎朝の雪かきに見る家の貌思い行きかうたかがとされど

しあわせの尺度を語る我もまた比較社会の小さき一人

炎天の舗道を歩むビジネスマン陽炎う姿は過ぐる日の我

朝まだき瀬音幽かな山の宿こころ放てり露天の湯ぶね

珍しき朝のかみなり夏匂う郭公鳴き止みつかの間の黙もた

慎ましき子供の神輿街を練る掛け声近づき遠のく夏日

風揺らすゴーヤの日除け役目終え蔓の葉色づく新涼の夕

あさぼらけ新聞受けの笠に露暑き残して起し初秋

朝まだき目覚めし朝は寒の雨ふとんの温さにまた夢さがし

水の春早苗の空に雲流る頬を撫でゆく風の声聞く

わが家に遅き春あり黄の匂う庭の水仙初花ひとつ

家住期に慣れ親しんだ横浜は三日過ごせど馴染めぬ街に

成長と翳す御旗も色褪せぬ身の丈こそとわれひとりごつ